



能登を中心とした震災の犠牲となられた方々、被災された方々に謹んでお悔やみ、お見舞い申し上げます。その後も頻発している余震や暴風雪、寒波で厳しい生活状況と思います。一日も早い復興をお祈りいたします。大変な年明けとなりましたが、今年も宜しく願い申し上げます。

大人も
再認識

小学生の時代感覚と生活認識

学校教育の一環として、越谷市で管理運営している古民家(2つの中村家住宅)での見学や観察、体験活動をした児童の反応や言葉には、驚かされたり認識を新たにすることが度々あります。今号では、これまでのそうしたことをまとめてみました。

“昔”って、いつのこと？

小学生の時代や時間の感覚は大人と異なります。現在の大人もかつて小学生だった頃の時代感覚は、とうに忘れてしまっています。「昔の暮らし」を学びに来館する学童に「昔」っていつのこと？」と尋ねると、小学3年生でもいろいろな応えが返ってきます。例えば、

武士がいた頃 100年前 300年前 1000年前 江戸時代
明治 ジイジが生まれた頃 昭和・・・

そこで説明者が「私は昭和生まれだけど、昔の人？」と言うと、(ウン、ウン)とうなずく学童や「ちがう、ちがう」と気を遣ってくれたりします。歴史(通史)や時代区分を社会科で習うのは6年生になってからなので、3年生頃の時代感覚はこのように実に様々です。

私たち生涯学習課職員は時代や時期の共通認識をもって見学や体験をしてもらうために、それをどのようにしたら良いかを試行錯誤してきました。社会科見学が始まった当初は「およそ〇〇年前」とか「江戸時代」などと説明しましたが、後には時代物差(1年を1cmにしたスケール)を用いました。それでも感覚的にしっくりこない様子も見られたので、最近では「電気や水道設備等がなかった時代」という言い方をしています。これはかまど竈やいりり囲炉裏、てんびんぼう天秤棒やだいばちぐるま大人車、ろうそく蠟燭や石油ランプが日常的に使われた時代を具体的に共通認識するための表現です。

「木が在る!」「骨っ!」 木材の本来の姿から学ぶ



大間野町旧中村家住宅 土間上方の梁

これは児童が主屋に入って土間で梁を見上げた時の声です。「木が在る」とは、太く曲がった、丸太のままの梁はりの存在に圧倒されてしまったという、とても実直な表現ですね。この瑞々しい感性に、私共も改めてこの造形やその背後にある思想に思いを致します。このような材は現代住宅にはありませんし、そもそもむき出しの梁は見えません。そして室内を見渡してみると、あらゆる箇所に木材が使われていることに気づきます。このことは現代の木造住宅も同様ですが、現代では壁紙や塗装などのために、木材そのものを見たり触れたりすることがかなり少なくなりました。旧東方村中村家住宅では梁組を「骨っ!」

と表現した児童もいました。また、「ふしあな節穴」を不思議そうに見ている児童もいました。平成生まれの先生の中には、「節穴」という言葉は知っていても初めて実物を見たという方もおられました。

わが国の非常に多種類の植物植生によって、建築物や生活用具が創作されてきたこと。それはまた季節の多様さやそれを生かしてきた先人の思想と知恵によるものであることを、私たちは改めて気づかされています。博学連携は決して一方通行ではなく、双方向で学び合える貴重な取り組みなのです。

博学連携

博物館(資料館)と学校が共同して児童生徒の歴史学習等を行うことです。越谷市には資料館がないので、2つの中村家住宅や発掘現場での活動を行っています。実施に当たっては学校と生涯学習課文化財担当とが打ち合わせをして、学習内容や活動内容を相談しています。

そこにはないものからの疑問と想像

古民家での見学や体験をして、そこにはないものに気づく児童もいます。その例をご紹介します。

水はどこから? そしてどこで使ったの?

越谷市で管理・運営している二つの中村家住宅には、本来あった“水周りの設備”はありません。それは当時の井戸や流し台、下水溝などです。生活には決して欠かせない水のことだけをテーマにしても、深い学習ができるのではないかと思います。井戸や風呂桶という生活用具・設備だけでなく、例えば風呂桶を水で満たすのにどれくらい井戸水を汲むのかとか、シャワーはないので体を洗う湯はどうしたのかなどから実感させることも可能です。



ある小学生の弁当
(大間野町旧中村家住宅にて)

時計がなかった昔には、どうやって時間がわかったの?

日の出、日の入りを基準にして大まかな時間を十二支などで表していた不定時法では、寺院の鐘の音などで時刻を把握しました。明治5年(1872年)、太陽暦に基づく定時法が採用されて現在のような表し方になりました。しかし、まだこの頃は一般家庭に時計があることはとても稀だったので、役場から寺院や学校に知らせたのではないのでしょうか。明治8年(1875年)の『進文学学校 規則』には、「始業の合図は呼子(ホイッスル)」とあります。他の学校ではハンドベルや板木を打って知らせました。やがて鉄道馬車や蒸気機関車が通るようになると、停車場(駅舎)でも時刻がわかるようになったことでしょうか。役場や学校、寺院、停車場の周辺の人々はこうした施設の動きや音から時間を判断したかもしれません。

こうしてみると、時計が各家庭になかった時の生活を疑問に思うという想像力は素晴らしいですね。

火のない時代はあったのですか?

これには仰天(ぎょうてん)しました。「昔の明かり」体験では、電気が通る100年以前の照明は全て火を用いていたことに児童たちは気づきます。そこで、ヒトが火を使うようになる以前の生活はどうだったのかという問いでした。ヒトが火を使うようになって数十万年、炎をずっと見続けてきましたが、近年の発達によって、普段の家屋の中で炎を見ることが稀になりました。このことが私たちの精神性にどのような影響を与えるのでしょうか……

寒い時にはどのように温まっていたのですか?

2つの中村家住宅での社会科見学は晩秋から冬に行われることもあって、電気が通ってなかった時代に寒さを



ここに灰と炭火を入れて使いました。

あんか
行火(越谷市教育委員会蔵)
これに布団をかけて温まりました。

どのように防いだのかという疑問が湧いたのでしよう。暖房にも火が使われましたが、手元や脚を温める器具(火鉢、行火など)でした。布団には湯たんぽを入れ、翌朝はその湯で顔を洗いました。炬燵は小さな炉の上に設えたことを伝えると、驚いた表情でした。

“そこにはないもの”に気づいて想像することは、とりもなおさず【現在】を別の視点から観るということにもなりますね。小学生の何気ない純粋な反応からその意識や感性を知ることによって、私共も新たな観点を見出すことがあります。

地域の様々な史料(建築物、民具、古文書、行政資料、写真等々)を教育現場でもさらに活用していただけるようにしていきたいと思ひます。